

本当に胸が締め付けられる思いである。南三陸町役場に勤務している知人が心配で、震災後1ヶ月程経過した頃に南三陸町へ訪れた。津波被害の大きさを目の当たりにして言葉を失ったが、知人と再会できた喜びに安堵し、家族も無事だったことを聞いて涙がこぼれた。津波で家や家族を失っても震災以来、不眠不休で震災対応の業務をしている職員の方々がいることを聞き、本当に頭が下がる思いであった。

震災を振り返って

ライフラインが寸断され、不便な生活だったことや、食糧やガソリンの調達が大変だったことなど、震災直後の生活を決して忘れてはいけないと思う。普段の便利な生活に慣れて忘れがちだった人への思いやりや家族とのコミュニケーションの必要性など、不便な生活をきっかけとしてさまざまなことを学んだような気がする。

環境活動に関して

環境保全課では、節電とCO₂削減のために、市役所の敷地内にゴーヤを植えて緑のカーテンを育てたり、公共施設におけるエネルギー削減に向けた管理の徹底など細かな節電行動に取り組んでいる。緑のカーテンは今年で3年目を迎え、種まきや収穫には近くの園児達にも参加してもらっている。今年は震災の影響もあり、種から育てることができなかったが、震災を理由に取り組みをやめることはしたくなかったので、苗を購入して植え

ることにした。現在、元気にスクスク育っており、カーテンの出来栄えが楽しみなところである。昨年は希望する住民への苗の無料提供も行ってきたが、今年は前年度のように配布できず、住民から「今年はないの?」という声も聞こえてきた。夏に向けて緑のカーテンを育てると、涼しく・省エネになるという認識がしだいに市民の意識にも浸透しつつあると実感している。今回の震災は、日常の便利で快適な生活をもう一度見直すという点で非常に考えさせられた。市で開催する環境出前講座で地球温暖化をはじめとする環境問題をテーマにした講演でも熱心に聞いてくださる参加者が震災前と比べて増えたような気がする。復興にはまだまだ多くの時間を必要とするが、市民1人ひとりが身近なことから始める環境施策を考え、PRしていきたいと感じている。



撮影：2011.6.28 大崎市役所の緑のカーテン

企業

大崎市

酒屋が酒を造れなかった37日間。 心を込めた酒造りと環境保全型農業で恩返しを。

松本 善文 株式会社一ノ蔵 代表取締役社長

取材日 2011.6.28

環境に優しい企業を目指して、環境保全型農業に取り組み、酒米として環境保全米を、酒瓶にはリターナブル瓶を積極的に採用。社内で「社会貢献推進クラブ」を立ち上げ、全社員ができることからエコ活動に取り組む。震災後、被災した子どもたちのために「未来へつなぐバトン 醸造発酵で子どもたちを救おうプロジェクトF174」を立ち上げた。

3月11日 14時46分

東京新宿の高層ビルの42階で、全国から100歳元が集まる会議に出席していた。地震発生時は、ちょうど休憩時間で会社と携帯電話で話していたが、電話の向こう側から伝わってくる声で、尋常

ではない状況がわかった。ほどなく東京にも地震が到達し、高層ビルが折れるのではないかと思います。エレベーターが停止したので非常階段で地上へ降り、公共交通機関が使えなかったため、レンタカーを探したが貸してもらえず、巣鴨に嫁いでいた姉の車を借り、東

京を出発したのは夜中の12時のことだった。高速道路が閉鎖されていたため、ひたすら一般道を走り続け、18時間以上かかってようやく翌日の夕方6時過ぎにたどり着いた。自宅に到着するや否や、すぐさま会社へと向かった。

被害の状況

倉庫や冷蔵庫に保管していたお酒のうち13,000本あまりが崩れ落ちて破損した。社屋の最上部にある醸造用の水を蓄えておく高架水槽が破裂し、その水が階下に漏れ出た。ボイラーや精米機も破損し、作業中の米も廃棄せざるを得なかった。原酒貯蔵タンクは幸いなことに建物側に倒れたため、被害が少なく済み、当面の出荷にも対応できた。津波で被災された沿岸部の蔵元さんと比較すれば、被害はあったものの、まだまだましな方だと思う。ラインの復旧から出荷までは11日間を要したが、「造り」は1ヶ月以上停止した。例年であれば終えている作業だが、ここまでこれたことをありがたく感じている。

津波で家が流されたり、家族が犠牲になった社員がいるものの、従業員全員の生命だけは無事だった。それだけで良かったと感じている。家を流された石巻の蔵人へ、通常は杜氏が仕込みの際に寝泊まりする部屋を提供した。震災直後から社員一丸となって、復旧作業に取り組んだ。3月18日には電気が復旧し、瓶詰めのラインが稼働できる状況となり、現場で早急に配送用のトラックをチャーターし、3月22日、震災後初めて出荷を行うことができた。

全国からの支援、被災者の立場からの寄付

震災直後から全国各地から支援や励ましの声をたくさんいただき、それが力となり2回の大きな地震を乗り越えることができた。震災後38日が経過した4月18日に酒造りを再開したが、酒屋が酒を造るという当たり前のことができるようになったことを蔵人も喜んでいて、ここまでご支援いただいた方々に対して、よりいっそう手をかけて、心を込めたお酒を造って提供することで恩返しをしたいと考えている。一ノ蔵では、例年4月にお客様を呼んでお祭りを実施している。今回は震災のため中止としその予算は宮城県に寄付を行った。全国主要都市で行ってきた催事もすべて取りやめ、その費用も寄付に充てた。我々も被災している立場であり、損害の修復にどれだけの費用がかかるか分からないという状況の中で複雑な思いはあったものの、宮城県民、宮城県の企業として「何かしなければ」という思いからの決断だった。



環境保全米

震災で、田んぼへの塩害などによる原料の確保の問題が懸念されたが、幸いなことに来年度仕入れる予定の米については見通しが立った。平成5年の大冷害の際でも無農薬、有機栽培をしていた農家では、平年と同じ品質で同じ収量を保つことができたと聞く。それをきっかけに慣行農法との比較、環境に優しい農業の推進のために「環境保全米ネットワーク」に賛助会員として加入した。平成13年に会員となり、無農薬米による純米酒を発売し、その売り上げの一部を「環境保全米ネットワーク」へ寄付をするという仕組みを作った。実際に酒造りに使用してみると、同じ品種で同じ造り方をしても発酵が違う経過をたどっていく。慣行農法の物であればだいたい3週間でお酒が仕上がっていくのに対し、有機米だとさらにそこから3日、4日と長い経過をたどる。視覚による判断でしかないが、有機米の方が、発酵が穏やかながらも継続的にゆっくりと進んでいき、慣行農法の物は一時期とても活発になるが、その後すぐに収束してしまうといった違いがある。個人的な感覚かもしれないが、でき上がった酒を利



撮影：2011.4.5 復旧作業

き酒しても慣行農法の物に比べて、有機米の方はまろやかな感じに仕上がっている。「造り」をやっている中で明確な差が出てきているので、これは今後も大切にしていきたい。慣行農法から環境保全型の農業にしていくことによって、この地域に昔いた生物、白鳥やマガンなどが戻ってきている。環境に優しい農業をしていくことが、子どもたちや未来への恩返しではないが良い環境を残していく手助けになるのではないかと考えている。



撮影：2011.3.12 倉庫の被害状況

NPO

石巻市民の私たちにできることを考えながら。

石巻市

川村 久美 NPO 法人いしのまき環境ネット 理事兼事務局

取材日 2011.5.29

石巻圏域の環境に関わる啓蒙教育と実践活動を通し、自然環境と生活環境が共生する社会を形成することを目的に活動に取り組む。震災後は団体の活動を一時休止し、「東北広域震災NGOセンター」の石巻地区活動拠点として場所を提供するなど個人で支援活動に従事。現在は「石巻市民による石巻復興支援プロジェクト」に携わる。

3月11日 14時46分

3月11日は家にいた。蛇田は海岸線から5kmも離れているが、非常な緊迫感を持った防災無線が入り、「津波がここまで来る、逃げなくちゃ」と思われた。あとで知った事だが、その無線が本当に大変なエリアの人たちには届いていなかった。地震で放送設備がダメになるとはまさかの事態だった。そのため、津波がくることが分からず、窓から見て初めて津波がきていることを知ったという人がたくさんいた。

2日目の晩までは余震がひどかったうえ、門脇町方面に見える赤黒い空とヘリコプターの爆音に不安を掻き立てられながら過ごした。3日目の朝が来て、泥にまみれ、なすすべもなく人々が続々と大通りを歩いているのを見て、大変なことが起きているのだと実感した。

蛇田は無事だという情報があったのか、4日目からたくさんの方が訪れてくれた。安否確認所のような機能を果たせるのではないかと考え活動を始めた。これが復興支援のスタートとなった。仲間や友人の生存を確認するという不安と焦燥の入り混じる活動だったが、生きていた姿を見た瞬間は、



この先ずっと忘れ得ない喜びになっている。いしのまき環境ネットとしての組織力を起動できる状態でない、深刻な被災状況だったため、個人として活動している。けれども震災後の支援活動は、いしのまき環境ネットがあったからこそつながりで展開している。

地域で炊き出し

13日には近所の神社で町内の人達が炊き出しをすると集まっていた。この辺りは農家が多いので